神戸新聞 2021年03月24日 水曜日 面名 朝四社 １３ 28ページ

イカナゴを守れ 上

漁期短縮 遅い資源回復 我慢と焦り

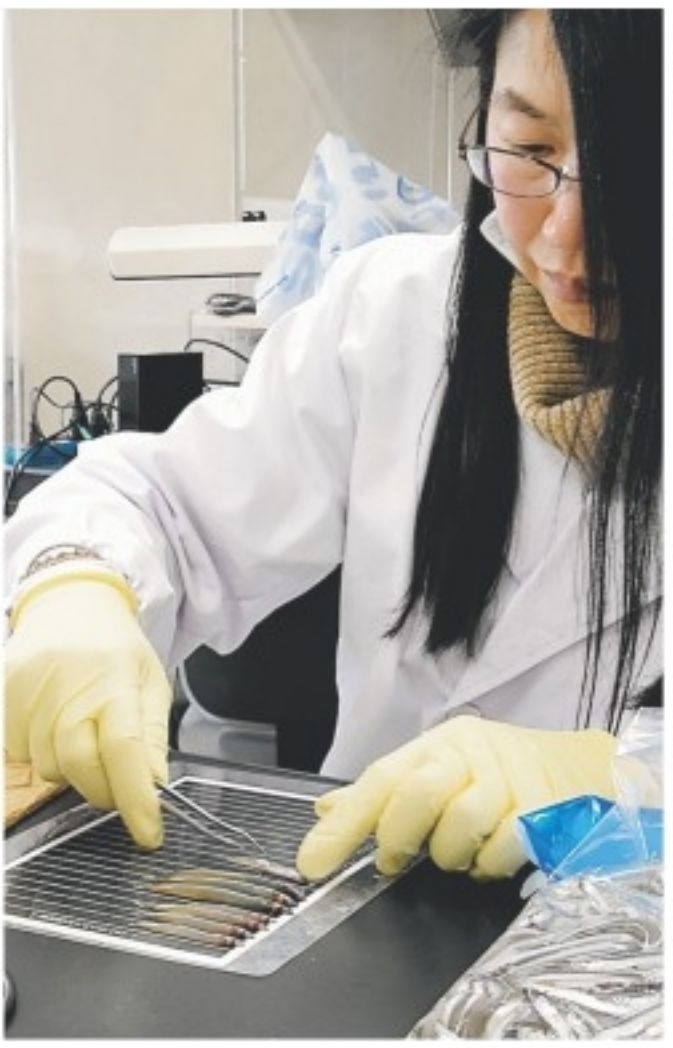
神戸市垂水区の垂水漁港は、大阪湾の漁場から戻ってきた男たちで活気に満ちていた。イカナゴのシンコ（稚魚）漁が始まった6日朝、瀬戸内海の早春の幸を盛った籠（25キログラム入り）が次々と水揚げされた。

「今年はいける」。同市内の漁業者でつくる摂津船びき網漁業協議会の前田勝彦会長(54)は声を弾ませた。その数が530杯に迫り、昨年の解禁日の3倍に上ったからだ。「これなら、1週間か10日間は漁ができる」。手応えは十分―のはずだった。

事態は当夜に暗転した。「今年の網上げ（終漁）を検討する時期にきている」。前田会長のもとに、兵庫県水産課からの知らせが届いた。漁初日に「まさか」の通告。22船団の平均漁獲量が1日200万尾を下回ったことが理由だった。

船が沈みそうになるほど取れたのも今は昔。近年では、漁獲しすぎないようにシンコの分布域を拡散させるため、一定サイズに育つまで解禁を遅らせるほか、目安の同200万尾を下回れば早めに漁を打ち切るなど、翌年の親魚を増やすための実践を重ねてきた。

「すぐに努力が報われないと分かっているが…」と前田会長。2日目以降も200万尾を超えることはなく、大阪湾では今月11日で漁を終えた。漁期は実質3日間。昨年の同2日間に次ぐ短さだった。



イカナゴのシンコの大きさを測る兵庫県水産技術センター主任研究員の魚住香織さん。漁期の判断にも使われる重要な作業だ＝明石市二見町南二見

◇◆◇

シンコ漁は2017年に転機を迎えた。漁獲量が前年比で9割以上減り、関係者に衝撃が走った。

県水産技術センター（明石市）が17年の解禁前に、親魚や産卵数を調べたところ、前年を大きく下回っていた。不漁予測を受け、日々の漁獲量を調べる同センターが、1船団の平均漁獲量が200万尾を下回ると、同課を通じて漁業者に終漁の検討を促す仕組みにした。これは過去の漁や産卵数のデータから、翌年に親魚が残り、漁獲回復を期待できるとして同センターが推計した数値である。

18年以降も状況は好転せず、20年は147トン（速報値）と過去最少を更新。今年も低迷基調のまま、漁を迎えた。

大阪湾と同じ6日に解禁された播磨灘。淡路島西岸の育波浦漁港（淡路市）では初日、籠の数で昨年の解禁日の30倍を水揚げした。姫路や明石の漁港でも、ここ数年の低迷から脱したかのように見えた。だが、漁を1カ月間続けられた往時の水準に遠く及ばず、今月17日で漁を打ち切った。

県内最多の62船団が出漁した坊勢漁協（姫路市）。今年の漁期は実質13日間と、過去最短だった昨年（5日間）に次ぐ短さだった。16年以前に比べて収入が半減し、シンコ漁に見切りをつける仲間も出始めた。

同センターの魚住香織主任研究員(51)は「辛抱強く資源回復に取り組むしかない」と強調。同漁協船曳同業会の森辰寿会長(53)は「親魚を残しただけ（翌年に）増えなければ、漁の継続も危うくなる」と理解を示す。ただ、どこまで辛抱を強いられるのか。先の見えにくい状況に、焦りと不安がぬぐえないでいる。

■

瀬戸内に春を告げるシンコ漁。不振の影響は庶民の味「くぎ煮」にも及ぶ。イカナゴを守る取り組みを追った。（山路 進）

◆次回は26日掲載予定。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。